

門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

第3回 成田祇園祭の移り変わり

成田の夏を彩る祇園祭がことしも7月4日から6日の3日間盛大に行われました。本年度は本町が当番町を務めましたが、計画運行の実施という大きな変化が見られました。成田山新勝寺の御本尊である不動明王の本地仏である、奥之院大日如来の祭礼として約300年の歴史を持つこの祭りも、時代に合わせて変化してきました。

戦後の最初の大きな変化は、昭和48(1973)年から山車の曳き廻しが毎年行われるようになったことです。それまでは3年に1度しか行われていませんでした。本町の渡辺久仁男さんの記憶では、高校生だった昭和40年前後には山車を曳いたことが一度もなく、本町は多分3年以上休んでいたのではないかとのことでした。この変化は祭りが町だけの行事から観光客を意識したイベントへ移り変わる大きな一歩になりました。

また同年には間近に迫った成田空港の開港、観光客の増大に

伴う山車の運行の計画や観光化などに対応するために実行委員会を立ち上げました。実行委員会の立ち上げは、昭和47年の当番町であった本町をはじめとして数町が提案し、仲町が当番町である次年度に発足しました。それと同時に、先鋒と呼ばれる山車・屋台の運行を仕切る役



ことしの本町の山車



昭和21年の本町の山車(渡辺久仁男さん提供)

が整備されました。昭和49年には土屋も加わり、9町と新勝寺が参加する現在の形が出来上がりました。

さらに時代の変化は、山車・屋台の屋間の曳き手の減少という形で現れました。渡辺久仁男さんの話では、当時の本町の曳き手は十数人ほどで、仲町の坂を上るのも大変なので、お囃子方はタクシーに乗せ、空の山車を曳いて電車をJR成田駅方面へ上るなど、少ない曳き手の中でも祭りを行う工夫がされていました。そのような状況の中で、本町とほかのいくつかの町が新勝寺へ開催日変更の要望書を提出し、平成13(2001)年からは、7月7日から9日までという伝統的な日程を7月7・8・9日に直近の金・土・日に変更して多くの観光客に見てもらおうようにしました。開催日変更は会社勤めなどで平日には休みを取れない人が増えて参加者が減少したことへの対策でもありました。

平成26(2014)年度は当番町が中心となって、計画運行が行われることになりました。これまでも、山車・屋台の経路や納車時間などは決められ、運行がスムーズになるように配慮がされていましたが、観光客の増大、先鋒同士の協議の長時間化、山車・屋台の待機時間などの問題がだんだん大きくなってきていたので、経路と運行時間の共有化を図り、時間短縮が行われました。

このように成田祇園祭も、時代状況に合わせて大きく変化してきたことが伺えます。本町はほかの町と比べると、若者衆も少なく、歌や踊りなどが控え目で、比較的小さな印象を受けますが、図らずも祭りの変化の場にはいつも居合わせてきました。祇園祭の変化を追ってみると、良いものを受け継ぎさらに良くしようとする、各町の人々の思いや心意気が随所に見えてきます。

(吉野 亨)

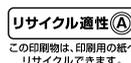
編集後記

10月になりました。過ごしやすい気候ですが、時折、肌寒く感じることもあります。秋といえば、皆さんは何を思い浮かべますか。「芸術の秋」「スポーツの秋」など、何をすることもよい季節ですが、わたしはいつも「食欲の秋」。ところで、今月27日は市立図書館が開館して30周年ですが、この日は、読書週間の始まる日でもあります。皆さんも市立図書館を上手に利用して、「読書の秋」をじっくり楽しんでみてはいかがでしょうか。

平成26年10月15日号 No.1277

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。